



タンチョウ博士のお話（第28回）

〇ふたたび、君の名は？

本紙で「タンチョウ博士のお話」の連載が始まって2回目(2017年4月号)に、「君の名は？」という題で一文を書きました。その問いの答えは「タンチョウ」でした。

今回もまた同じ問いですが、答えは同じではありません。前回の答えは、タンチョウという生物の「種」を現す名前でした。しかし、1個体しかいない絶滅寸前の動物は別にして、「種」は複数の個体からなるのが普通です。

たとえばヒトという「種」は、80億近い個体からなります。日本という地域に限っても約1億2600万という数があります。そして、その一人一人に特有の記号、つまり名前がついています。

この個別記号があるからこそ、肉体は消えても、名前をもとにそのヒトの記録や記憶が残ります。歴史書の多くはいわば名前があって成り立ち、しかも個体の独自性を明らかにすることで、個体と個体との関係、つまりヒトの社会の仕組みも見えてきます。

では、ヒト以外の動物ではどうでしょう。名前がなくても姿かたちが少しずつ違えば、これを手掛かりに、個体を特定できます。しかし、タンチョウではどうですか。確かに翼の白黒模様などいくつか手掛かりはありますが、決め手はごく限られます。ですから、群れているツルを1羽1羽見分けるなど、専門家でも、とてもできない相談です。

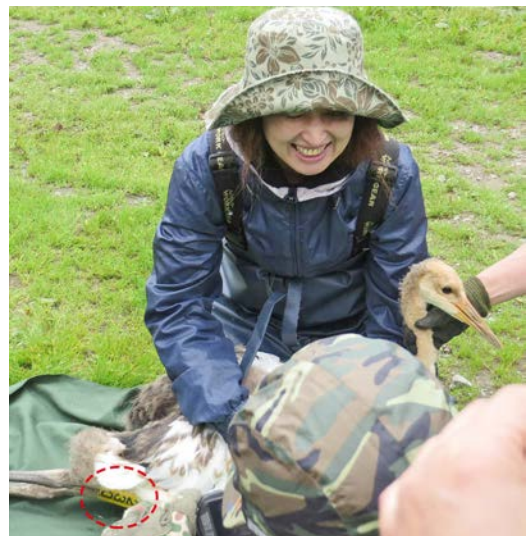
舞鶴遊水地で繁殖しているタンチョウのオスとメスは、いくつか異なる手掛かりがあり、区別はつきます。ただ、微妙な違いなので、判別は容易ではありません。でも、もしどちらかが死んで、別の個体が後釜(再婚)に入ったら、見分けがつかず。

しかし、ほとんどの場合、番いの相手が代わっても同じツルにしか見えません。そこで、タンチョウは生涯同じ夫婦で暮らすという神話が生まれ、結婚式の着物や引き出物などに“モテる”のです。

今、舞鶴遊水地の家族は越冬地へ行って不在です。しかし、どこかで見かけたのが長沼の家族か否か、確かめるのはとても厄介です。それを簡単に知る手だての一つは、タンチョウ1羽ごとに名札を付けることです。標識付けとか、一般に足環をつけることからバンディング(バンド付け)などと呼びます。

ただそれには、相手を捕まえる必要があります。捕獲方法も手捕り・くくり罠・無双網などいろいろあります。これまで主に手捕りで600羽以上のタンチョウに標識を付けていますが、作業中の事故はごく少ないものの、残念ながらゼロではありません。捕まえて標識付けなどせず、遠くから顔認証のような方法で個体識別ができるシステムはできないか、と思っていますが…。

ともあれ、上にあげた再婚なども、標識付けで初めて明らかになったことです。越冬地で長沼の家族を守ることが、繁殖地長沼でツルを守ることへ繋がっていますから、重要な役割を持つバンディングは、細心の注意を払って行うべきでしょう。(文・撮影：正富宏之)



《バンディングの様子》

幼鳥に足環(左下のところに230の番号が見える)をつけ終わり、これから放鳥。

【問合先】役場企画政策係 ☎76-8015